長崎新聞　2010年1月31日（日曜日）　25面

長崎新聞　（第3種郵便物認可）

ハイチ大地震報告

生存信じ救出活動続く

寄稿

長崎大熱帯医学研究所教授
山本　太郎氏

ハイチ大地震の被災者救援のため、国際緊急援助隊医療チームの一員として現地で活動した山本太郎・長崎大熱帯医学研究所教授から、被災の生々しい状況を伝えるリポートが30日までに本紙に届いた。各地に残る地震のつめ跡、劣悪な環境の中で懸命に行われている医療活動の様子などを紹介する。

山本　太郎教授

今、この記事をニューヨークのホテルの一室で書いている。午前4時、窓の外には、いつの間にか降り始めた雪。じっと耳を澄ますと何も聞こえない透明な時間が現れる。昨日まで日中の気温が40度近くまで上がる喧騒（けんそう）の真っただ中のハイチにいたとは自分でも不思議な気がする。

西半球の最貧国、ハイチを1月12日午後4時53分（日本時間1月13日午前6時53分）、マグニチュード（M）7・6の地震が襲った。

震源は首都ポルトープランス郊外15キロ。推定死亡者数は10～20万人。半数は子ども。被災者300万人を超える。100万人以上が安全な水、トイレへアクセスできない。外務省、最高裁判所、中央郵便局は全壊、大統領官邸、保健省、海外援助省は半壊、政府は残った組織を空港内の残存施設に移し、辛うじて機能している状況にある。

そんな中、震災後5日目にポルトープランス郊外のテントを設営し診療を開始した日。受け付けの外には被災した人々。運び込まれる患者たち。開放骨折、ガス壊疽（えそ）、感染を伴う外傷、骨盤骨折…。一人一人の処置に時間がかかる。重傷者をアメリカの医療チームに紹介する。時間が飛ぶように過ぎていく。それでも、少しでも何かができればと体を動かす。汗が噴き出す。

テントの中で被災者の医療活動に取り組む国際緊急救助隊の医療チーム　＝ポルトープランス郊外（山本救援提供）

6年ほど前にハイチに暮らしたことがある。初めて訪れたハイチで、多くのハイチ人にお世話になった。今回、地震の報道を聞いて、ハイチへどうしても行きたい、行かなくてはいけないと思った。この事態に医師としてレオガンと呼ばれる地域に入った。軍用ヘリが上空を飛び交う。日本のシスターが30年以上にわたってハイチの人々のために支援を続けてきた地域でもある。

震災の状況は事前の予想を超えていた。パンケーキが押しつぶされたようなありさまになることから「パンケーキ・クラッシュ」と名付けられた倒壊した建造物群。そうした様子が何十キロと続く。がれきの下には大勢の人々が地震直後の状態で残されているに違いない。

テントを設営し診療を開始した日。受け付けの外には被災した人々。運び込まれる患者たち。開放骨折、

や米国人など捜索を続けている。最後の一人まで「救出」するという。震災後10日過ぎても生存を信じているという。その瞬間、記憶が一気にフラッシュバックした。そのホテルは6年ほど前、内戦に巻き込まれた時、多くの時間を過ごしたホテルだった。

多くを失ったハイチ、そんな中で、これからハイチは中長期的な復興支援が必要となる。かつての同僚が「多くの仲間を失った。でも、今は立ち止まるわけにはいかない」といった、その言葉をかみしめたい。

として、あるいは国際保健学を講じるものとしてハイチへ行かないとすれば、自らの存在意義はあるのかとさえ思った。

診療中の一日、ハイチの外務大臣へ日本チームの活動報告を行うために首都に出向いた。外務大臣に報告を済ませた後、市内を視察する機会を得た。かつて、この街に暮らしていたことを知った大使の配慮だった。かつて暮らしていたアパートへ行ってみた。跡形もなく倒壊していた。アパートのあった横のホテルではアメリカ軍が重機を動かし、がれきの下、国連職員